MBS毎日放送
アナウンサー
上泉雄一氏

後輩アナウンサーの教材のひとつとして

〈略歴〉
生年月日　1969年2月9日
入社年　1992年
出身地　兵庫県
出身大学　早稲田大学
［担当番組］
上泉雄一のええなぁ！（月～金）
成毛眞のラジオ（月）

毎年節分に行われる「堂島薬師堂 節分お水汲み祭り」や「ようこそ！ 北新地へパーティー」の司会を担当させていただいております、MBSアナウンサーの上泉雄一です。

私が毎日放送に入社したのは、30年前のちょうどバブルがはじけた1992年（平成4年）で、本社は梅田・茶屋町に移ったばかりの頃。それまでテレビ・ラジオは「千里丘放送センター」から放送し、営業局などの本社機能は堂島の毎日大阪会館にありました。その意味では、北新地はMBSとしてもたいへんゆかりのある街です。

入社当時、先輩アナに飲みに連れて行ってもらった時には、さらにその先輩の北新地での背びれや尾びれがついた「武勇伝」をよく聞かされたものです。そこに時を経て、さらにひと盛り加えられて現在まで語り継がれておりますが、今となっては確かめようがございません（苦笑）。華やかな時代だったとはいえ、それほどに北新地は「大人の社交場」としても魅力的な響きがある街です。

今でも「昨日、新地で飲んでまして～」なんて話をしますと、「あら、うわちゃん、ちょっとええ話でもあるんかいな？ 羽振りよろしいなぁ…」との声が聞こえてきます。「いえいえ、ちょっと軽くバーで飲んだだけですねん」「またまたぁ！」

みなさまご承知のとおり、決してホステスさんと楽しく飲む、それだけの街ではないことも北新地の魅力です。

お水汲み祭りなどを通して、ＫＲＫの皆様とご縁ができていろんなお店を紹介していただきました。飲食店はもちろん、飲み屋さんも超高級なクラブだけでなく、私のようなサラリーマンでも気軽に行けるバーも多く、それぞれのお店がとても個性的なマスターやママのもとで、それぞれのご予算でそれぞれのスタンスで楽しめる街であることが分かりました。

またカラオケを楽しむも良し、生演奏で歌うも良し、ショーやマジックなどのエンターテインメントを楽しむも良しなど、ほんとうに様々な顔を持つ街です。もちろん、ここ一番の接待場所としての社交場の地位は、何ら変わるところではありません。

そんな場所に同席させていただいた時に、お酒の場でのお客としてのふるまい方や、たしなみを多くのカッコいい方々に教えていただきました。またそこで、席についてくださるホステスの皆様に儚い夢を見させていただきました。そのホステスさんの「おもてなし」は、私も人と接するお仕事をさせていただくものとして大変勉強になっております。

以前、発刊された「ホステス心得帖」復刻版。最近は、後輩アナウンサーの研修だけでなく、企業様の「話し方」研修などもさせていただいておりますが、この「ホステス心得帖」は、教材として多くのところで活用させていただいています。

特に私自身がハッとさせられたのは、「座持ちのテクニック」です。『お客様の聞き手に回れ。聞いている証拠に相槌を打て。お客様の顔を見て話を聞け。脇見ばかりするな。お客様は落ち着けない』。トーク番組やインタビュー時などでは、とても大事な要素です。

『もっともダメなホステスは、お客様の話の腰を折って、尋ねられてもいないのに自分のことばかりトウトウと喋りまくるホステスである。雄弁なホステスより、寡黙にして真剣に聞いてくれるホステスをお客様は好む。お客様の話は、顔を正面に向けて聞くのが良い』。

この「ホステス」というところを、私は「アナウンサー」という言葉に置き換えて伝えています。

放送において、聞かれもしないのに自分の話を延々と続けるアナウンサーより、寡黙にして話を「引き出す」のが我々の役割だ、ということを一流のお店のホステスさんに身をもって教えていただきました。

最近は「話し方」というより、「聞く力」をどうすれば身に着けることができるのか、というご質問をいただきます。まさにそれは、一流の接客業の方々の中に答えがあります。

もちろん、高級なクラブでなくても、心地よく話を引き出してくれるマスターやママのいるバー、またタイミングを見て、そっとしておいてくれるお店。知らないうちに、そのお店の雰囲気の中で遊ばせてもらっているんでしょうね。

北新地にはその空気を絶妙に読んでくれる方が多いからこそ、その時の気分に応じて「今日はあの店に行こう」とついつい足が向いてしまうのです。

去年の春、最初の緊急事態宣言が発令され、繁華街の現状を取材するためにこの街を訪れた時、灯りが消え、真っ暗になった夜の北新地を目の当たりにしました。その現実に大げさではなく喪失感と絶望感に襲われました。ということは私以上に、経営者の皆様はそれどころではなかったかと存じます。

この原稿を書いている（令和3年）11月下旬現在、北新地には少しずつ活気が戻ってきました。コロナ禍で家呑みしかできない時期が増え、その状況に慣れてしまうと、世の中が少し落ち着いて緊急事態が明けて規制が緩和されたなかでもすぐには客足が戻らず、「別に外で飲まなくても…」と思うお客さんが多くなってきた、とお店の経営者の方からお聞きしました。

かたや、お客様の「まだこの状況でおおっぴらに北新地に向かうのは」という気持

ちも、ひとりの飲み客としてよく分かります。この記念冊子が発行された時には、世の中の状況がどうなっているかは、見当がつきません。

これまで、我々は、新年会や忘年会、歓迎会に送別会と、何かと理由を付けては街に繰り出しお酒を飲んで、明日への活力にすると同時に季節や時の流れを感じました。「年末だからタクシーがつかまらない」と愚痴が言えたのも、実は幸せの証だったのかもしれません。

きっと、そんな普通の日常も間もなくやってくると信じています。

そして、さんざん飲んで翌日エラいことになり、「もう二度と酒は飲まない！」と心に固く誓ったその日の夕方、昨日のことはどこへやら、華やかな灯りと共に「ようこそ！北新地へ」と出迎えてくれるこの街に、またふらふらと性懲りもなく出向くことでしょう。その時はどうぞ、お手柔らかにお迎えください。